

# 聞き書き史談ほか萬控え(二)

林 寅 喜

(会員・佐伯市中の島)

## 臼坪川の今昔

### (一) 昔の臼坪川

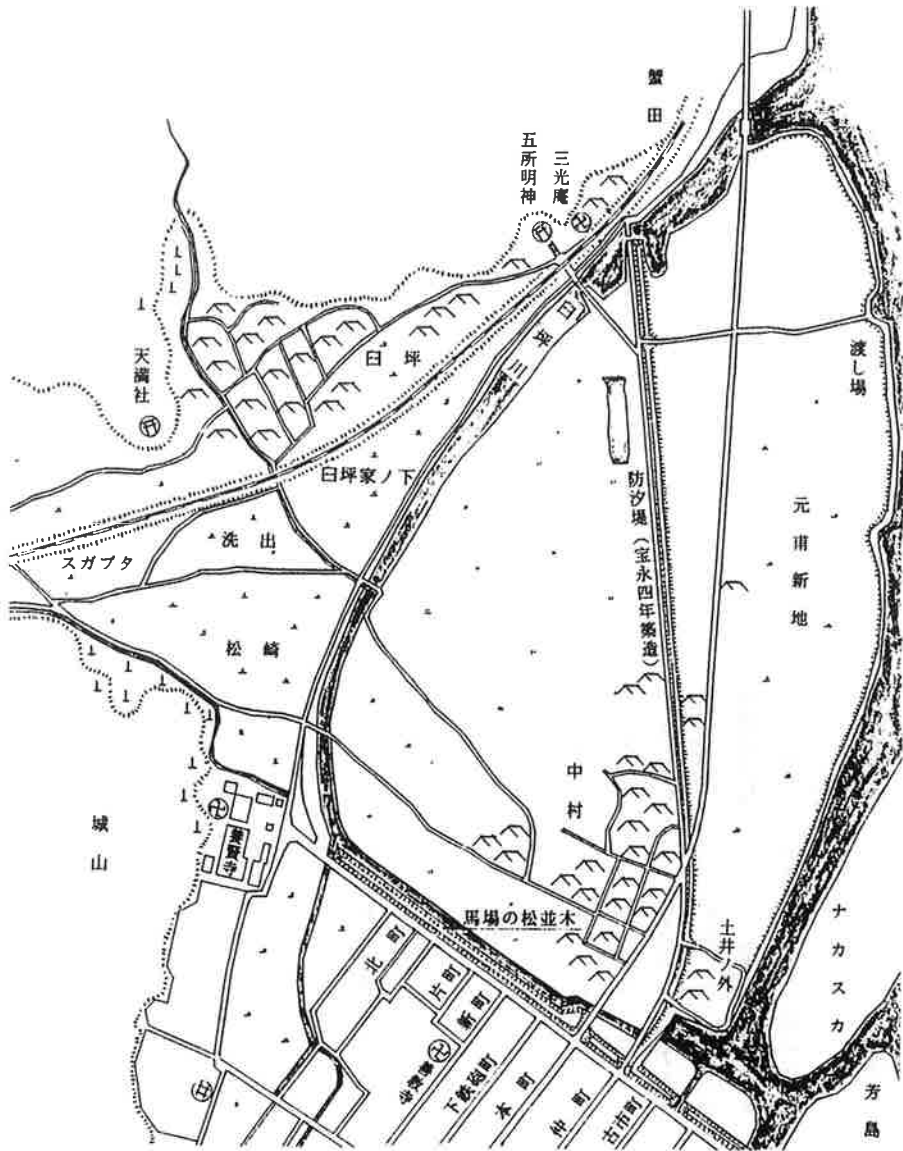
高橋市太郎翁聞き書きより

翁(明治三十八年生)が少年期を過ごした大正初年頃までの臼坪川(昔は前田川と呼んでいた)河口は、常盤橋附近で中川(長島川ともいう)と合流していた。(地図参照)当時の中川は川幅が今の何倍もあり、税務署の敷地など勿論見ることもなかった。その後大正五年十月、佐伯駅の営業開始に伴って大手前までの道路が整備され、臼坪川の河口を横断して常盤橋が架設されたが、流心部に石垣を築いて橋脚の代わりとし左右に二つの橋を架け渡した。それは木造でも珍しいトラス構造であったと言ふ。(一六六号巻末に写真を紹介すみ)

同じように五所明神の前にも古くから二橋架けられていたが、(八二一六六号)こちらは石橋であった。また、そこから東方向に中川の河岸まで小さな土手が続き、川縁りには長島へ渡る舟着場があった。当時今の南海病院附近は入江のようになっていたが、大正九年頃から始まった常盤中村地区の耕地整理によって埋め立てられ、昭和八年海軍航空隊の開設と前後して水交社が建てられた。しかし、これも戦後は南海病院として生まれ変わった。

余談になるが昭和の初め頃、税務署の敷地へ豊予要塞司令部と大分憲兵隊佐伯分遣隊があったが、どちらが先に入っていたか記憶にないと言ふので調べて見ると、丹賀要塞の大砲試射が始めて行なわれたのが昭和五年で完成は八年、憲兵隊分遣隊の開隊が九年(以上佐伯市史)となっているから、要塞司令部の方が先になる。なお、丹賀要塞で十六人の死者と四十数人の負傷者を出した暴発事故が起きたのは、太平洋戦争が始まった十六年十二月八日から三十九日目の十七年一月十一日のことである。

地下の前には深みの所もあって鮎やクマエビなどよく



大正7年頃の白坪・中村附近

図は武藤等氏(会員)が調整されたものをトレースして縮小したものです。

獲れ、五所社の前では潮が引いたあとの溜りでハゼの掴み獲りも出来たし、夏期にはよく泳いだと話した。

当時は地下の前から招魂所の下まで田圃続きで、洪水時に満潮と重なる小さな土手を越えて冠水することも幾度かあったと言う。その後大正九年十一月には日豊線が榑原(直川村)まで開通したので、地下も招魂所も線路で遮られてしまったが、それでも広い面積が残った。当時は養賢寺から今の火葬場道の間も田圃であったが、戦後一部が埋められて墓地となると次々と埋められ、今のように宅地化してしまった。

大正十五年頃であったと思うが、養賢寺から五所社前間の道路が拡幅(それまでは幅が一問位しかなかった)されたのを記念して、吉野桜を二百六十本、白坪側を白坪青年団が、反対側を中村青年団が植え込んだ。その後白坪側の桜は水路工事や道路工事のため切り倒されたり立ち枯れたりなどして、今は一本も残っていない。しかし、反対側には鶴城高のグラウンド横に何本か古木となつて残っており、のちに補植されたものと合わせて今でも開花時になると、通る人の目を楽しませてくれると話した。

白坪川は養賢寺の前にある観音像(翁が在郷軍人会に所属していた時建立した)の前から、山手・三の丸方向と馬場の松並木(鶴城高前の土手)方向とに分かれていたが、こちらは幅が五間位で電話局の前まで続いていて、そこから元の郵便局敷地内を通過して梶原までは、幅が一段と狭くなっていた。ここはまた水の流れが至つて緩慢で悪臭もあった。それでも鯉は多くいたが、腸は真黒くなっていた。そこで当時世間ではこれにかこつけ、腹黒い人のことを指して「馬場の鯉」と揮名したと言う。

梶原で内町川と合流していた溝も、昭和八年から始まった幹線道路開通のため埋め立てられ、建設協会のある附近一帯も一段と狭くなった。今の城東公園は旧河川の名残りであると言う。

註 前記合流点から昔太平橋があった「明月」の前までは戦後まで河川敷が残っていたが、これも昭和三十八年度から九年度にかけて行なわれた都市計画事業による排水路工事のため埋め立てられ、今は駐車場と会議所や農協の敷地の一部として供用されている。

なお、白坪川の右岸側(東小学校側)には昔から石垣

はあったが、灌木や茅が覆い茂ってよく見えなかったそうである。

## (二) 戦後の白坪川

私の追憶より

昭和に入って二十九年から幹線道路と常盤橋間に洪水調節のための水門が設けられたが、これによって白坪川の流速はより緩慢となって「ヘドロ」の堆積が進み、葦が生い茂って流れを阻害する始末となった。その上、宅地化が進むにつれて生活排水の流入が一段と増え、富栄



工事前の白坪川

養化された水質のため葦の生育が旺盛となり、年を経るにしたがい川面一杯に繁殖し、僅かに流心部を残すのみとなった。

そこで佐伯市では昭和四十年代の後半になって葦を取り除くための浚渫(当時私はこれを担当した)を行ない、一応往時の姿に戻すことが出来た。その後葦は生えることなく目的は達せられたかに思えたが、洪水時に於ける浸水対策など抜本的な改修計画の樹立までには至らなかった。

ところが、昭和五十年七月から始まった佐伯市公共下水道計画第一期認可区域の設計委託発注に当たり、これに組み込む計画とした。当時私は担当者として直接これに携わっていたが、白坪川の過去についてはそれなりに認識していた積りであったから、実施に際しては現状の河川断面を狭めることなく、かつ流水の阻害となるような構築物は避けるべきであると考えていた。

その理由として

(一)過去の白坪川周辺には兩岸に農地が開け、流域も急峻な山地を除くと平野部は比較的地盤が低く、そのため常に冠水の危機にさらされ、加えて干満の影響

による後退水位（バックウォーター）は上流部まで達し、洪水時にはさらに追い打ちをかけられて水位の上昇を招いた。

(二)戦後右岸側常盤・北中地域の宅地化が進むにつれて各所で土地の嵩上げが行なわれ、これに伴って洪水時の冠水面積は益々狭められていった。

この様な状況から判断して白坪川は一面的には遊水地（汐遊び）としての役割を果たす河川として計画すべきであると考えていたからである。

註 佐伯市公共下水道事業発足当時の経緯については、平成三年五月発行の私著作の手記「佐伯市公共下水道の歩み」に詳述している。

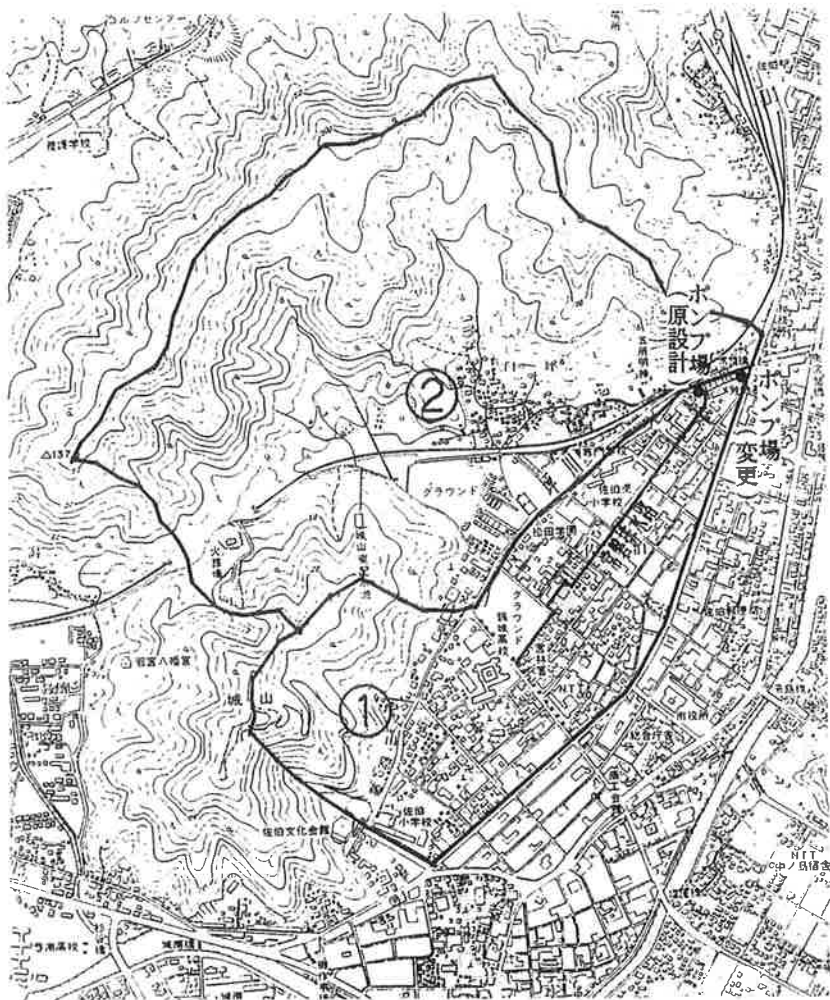
一方、公共下水道計画では鶴城高ランド東端から、元佐伯職安の裏を経て白坪川に流入している溝（常盤排水路という）の近くにあった隔離病舎跡の裏にポンプ場を設けて、常盤・北中地域の浸水をポンプアップするという計画であったが、この溝と白坪川は全域で道路側溝を通じて互いに結ばれていたため、洪水時にポンプアップしても理論的には「水がグルグル回るだけ」という結論から、側溝の流入径路を徹底調査して分水点をどこに

するかなど課題は多く残されていた。なお、今回の変更によってポンプ場は常盤橋の上流側右岸寄りに建設する計画であるという。

### (三) モデル事業と白坪川

昭和五十一年度から始まった佐伯市公共下水道事業のうち、雨水計画の中に組み込まれた白坪川の改修は、汚水（家庭排水）施設や終末処理場建設の先行によって後年施行となっていたが、平成元年度から始まった「水と緑の景観モデル事業」の推進によって、住民が等しく水と緑に親しみを持つような河川として生まれ変わることを目的とし、三年の歳月をかけて完成した。しかし、このモデル事業では白坪川の全流域から雨水（当分の間は家庭用雑排水も流入する）を集め、一本の川として流下させる設計ではなく、白坪川を境として東側（図①の区域）と西側（図②の区域）の二本立てとした設計となっており、図①の流域に降った雨水は、現在東小学校側に併行して構築されている「レンガ道」（ボックスカルバート）によって排水される。

したがって、白坪川は今迄と違う狭い流域を持った河



川として整備されたこと  
 になる。

では何故このように  
 分割して二本立ての設  
 計としたのか、その理  
 由は概ね次ぎのよう  
 である。

(一) 前述の常盤排水路  
 と臼坪川の分水点  
 を決めることに困  
 難性がある。理由  
 は相互間に高低差  
 がないこと、仮り  
 に分水点を決めて  
 施設を施したとし  
 ても、洪水時には  
 これ以上に水位が  
 上がる可能性がある  
 。

(二) 臼坪川の流域 (図

②の区域)は山林野が広く平野部が狭い。したがって、流入の水質は極めてよいと判断される。

(三)これに対し図①の区域は住宅の密集地で不純物が混入し易いため、水質汚濁の度合いが比較にならない位高くなる。

こうしたことから、白坪川の清流を保つため二本立ての排水計画となったと推察するが、カルバートを設けたためその分だけ白坪川の河川断面は縮小された。勿論それだけ流域面積が減り流水量は少なくなった。しかし、



排水工事が完了したときの白坪川  
帯状の構造物は排水溝(ボックスカルバート)



南海病院附近から上流を望む

前にも述べたように洪水時と重なった満潮時に於ける遊水池としての役割を果たせることができるのか、当初の計画に携わった者として老婆心ながら気にかかる。

この事業に投資された費用と経緯は次ぎの通りである。

一、佐伯市公共下水道事業(第一期認可区域二一七ha)  
の建設大臣認可 昭五一、八、三〇

白坪川の関連事業

一、雨水幹線築造工事 昭六二一平成二

山手地域の雨水幹線設置 延長八〇二・一米

レンガ道(カルバート)設置 延長八〇二・七米

事業費 三億二百万円

一、水と緑の景観モデル事業

白坪川改修工事 平成元一三

事業費 一億八千五百万円



モデル事業完成後